

詩編 47 編の黙想（松見俊）

主なる神は王として即位される：諸国の民の解放の音信

この詩は捕囚後の細々と続くユダヤ教祭儀国家の新年の歌として歌われ、ユダヤ教の伝統では新年の礼拝でトランペットの伴奏で7回詩編 47 編が歌われた。歓呼して、手を打ち鳴らし、諸国の民を従わせ、諸国の民を治める主なる神の姿が示される。主なる神が王として上られ、即位することはイスラエルと諸国の権力を徹底的に相対化する解放を意味しているが、この歌もエルサレム（ダビデ家の王）中心主義、シオニズムになる危険がある。それほど長くないので、まず詩編 47 編を朗読してみよう。家族がノンクリスチャンの場合はトイレで黙読もよいのではないだろうか？

主なる神への賛美は2節と7節の招詞「手を打ち鳴らせ (tiq'û- kâp, Oh clap your hands)、喜び歌え、叫びを上げよ (hârî'û)」と「(琴の伴奏で) 歌え、ほめ歌を歌って、告げ知らせよ (znm̄m̄rû が5回繰り返される)」で導入される。招詞の後に賛美の内容が続く。主なる神の支配の確立と王座に就くことである。

1. 主なる神の即位

ヴァイザーによれば、この詩は、歴史的あるいは終末論的、あるいは、祭儀的な解釈が可能である。キリスト教会は主イエスの昇天と父なる神の右への即位の礼拝で歌われてきた。イースターからペンテコステに至るこの時期としては格好な題材である。松見は終末論的希望として、「愛」(5節「彼が愛する 'ahēb ヤコブ」)と義をもって世界を治める主なる神の将来的希望・人間の希求を歌ったものと理解する。むろん、礼拝における神賛美にも通じるし、バビロン捕囚から解放された神殿の再建と献堂式という歴史的背景も排除できない。「諸国の民」の巡礼者たち、「自由な人々」(貴い人々)、「神の民」が集まってきている。その先頭に「主」がエルサレムに上られるのである。ある意味で現在の礼拝祭儀において将来の希望と過去に起こった救済の出来事が記憶において現在となっている。「手拍子」(クラップユア ハンド)という表現が興味深い(松見がヴァージニア州リッチモンドに滞在中マイナーリーグの観戦に出かけたが、野球場のバックスクリーンに「ノイズ」という呼びかけが出ると、「ワアー」と完成を挙げる。それまで「ノイズ」を「雑音」と考えていたのに新しい意味を発見した感じであった。福音唱歌にも「シャウト」という英語が登場する。沈黙も大切であるが「歓呼」することもあっていいのではないか！

2. 福音宣教の使命に生きる

歓呼と喜びは「恐れ」とセットになっている(3節)。それは、イスラエルの信仰が政治力・軍事力による世界支配の野望から生れたものではなく、主なる神が支配されることによってこの世界の諸力が徹底的に「相対化」されるという信仰の表明であることを意味している。信仰者はこの神支配に献身的に奉仕する者たちである。神の僕たちは自分たちの救いだけでなく、諸国民、全世界の救いを常に視野に入れ、神の宣教の手段として自らを理解していた。

3. 歴史・世界の目標

この世界は如何に暴虐、虚偽が満ちていても、信仰者の群れは小さくても、神の国の完成、シャーローム（神と人、人と人、人と被造世界、被造世界に生きる物たちの中の「平和」）が成就するという目標をもっている。イエス・キリストの到来はその完成の圧倒的成就である。神は常に「到来する神」である。（ユルゲン・モルトマンの解釈：ヨハネ黙示録 1:8「今おられ、かつておられ、やがて来られる」（やがて「ある」であろうではなく、「来られる」である *Das Kommen Gottes*. E. ユンゲルもまた「神存在は生成の中にある」（*Gottes Sein ist im Werden*）というカール・バルトの理解を踏まえて自分の立場は *Gottes Sein ist im Kommen* であると言う）。かの日にはすべて諸国民(*gōwym*, 'ammîm)の区別が多分それぞれの民の自己同一性を保持されながら、廃止される。

4. 「盾」(*māginnê*, shields)としての神の民

「神の民」作為的な「人種」などではなく、民族や国家的な纏まりもはなく、信仰者の会衆である。神の民としての「教会」「会衆」は地上の民ら (*gōwym*) を不正義、愛のない過酷さから護る「盾」である。最初詩編 47 編を読んで、心惹かれるのは、10 節だろうか？「諸国の民から自由な人々が集められ、アブラハムの神の民となる。地の盾となる人々は神のもの。神は大いにあがめられる」。「盾」は複数形で「シールズ」である。神がアブラハムの神の民を護る「盾」であるのか？しかし、「盾」は複数形である。2015 年政権が強行採決で安保関連法案を可決させた前後、青年たちが「シールズ」を立ち上げ、民主主義と護る「盾」となろうとした。私たちは主なる神の愛と義を護る、民衆を暴虐から護る「盾」(複数形) でなくてはならないだろう。そしてそれらもま「神のもの」(神に属する)のである。新共同訳は、「自由な人々」と翻訳しているが、*nādîbê 'ammîm* は「the princes of the people」であり、残念ではあるが、「自由な人々」は意識しすぎである。